

< 附属校からの眼 > 附属から大学を見て

著者	清水 聖
著者別名	Shimizu Sei
雑誌名	筑波フォーラム
号	57
ページ	16-19
発行年	2000-11
URL	http://hdl.handle.net/2241/8385

附属から大学を見て

清水 聖

附属坂戸高等学校教諭

はじめに

本校は、戦後まもなく、今では少なくともなってきた埼玉県の農村地区に、農業後継者育成を目指して一町五ヶ村の組合立の学校として創立された。元々は農業科、家庭科の実務・実修校として創立したのだが、近接地に東京教育大学附属農場があったことから、当時の諸先輩の大変な苦勞の末国立に移管され、東京教育大学附属となった。

その後50年余りの歳月が流れている。その間本校も移管後に定時制から全日制への移行、学科の新設、改組など様々な変遷を経て現在に至る。中でも一番大きな改編は、40数年の職業学科としての実績をもとに、平成6年全国でも先駆けとなる「総合学科」を創設したことである。このことは高校教育改革の実践として、教育界でも話題となったほどのことである。今まで大学内でも「附属坂戸高校？」と首を傾けていた方々にも本校を

認識していただくことができたのではないかと思う。

実際、このころより大学との関係も徐々に変化してきたように思える。

大学と本校との関係

私は、本校に奉職してより10年余りになる。大学との直接の関係となると、ここ数年で随分変化してきた。以前までは年に2回の教育実習や夏休みの農業実習、TASAE（アジア農業教育セミナー）の授業見学といったものが主な関係であった。その他に学校教育部を中心としたプロジェクト研究や教科研究グループなどには、附属学校としてそれぞれに精一杯対応してきたが、数年前までの大学との関わりというのはこの位であると記憶する。

しかし、本校が総合学科に改編したのとはほぼ同時くらいの時期から今までのものに加え、違った形で大学との交流が

起き始めているように思える。以下に箇条書きにする。

- ・各教科などで大学院生の研究授業を本校で行い、研究活動の連携を図っている。
- ・大学生の卒業論文のテーマである「ピオ・ガーデン作り」を本校農場を利用して研究している。
- ・本校の農場将来構想に合わせた農場作りを大学の教授に指導・助言していただいた。
- ・選択科目「農場実践」を大学の農業技術センターにおいて行い、単位認定を行っている。
- ・LANの専用線が結ばれいち早くIT革命が行われた。
- ・本校の韓国修学旅行の事前学習のため、大学の韓国留学生を招いて語学学習や文化交流を行っている。
- ・副学長や大学教職員の来校を多数受け様々な助言をいただいている。

これらのように本校の特性を生かして、今まで大学との関わりで余り無かったことが行われ初めてきた。これらは国立大学の附属学校という研究校である本校にとっては大変に喜ばしいことであり、成功に導く義務を感じずにはられない。

今後、学生のみなさんも研究授業や卒

業研究などで本校を利用する考えがあるならば、本校一同協力させていただくつもりである。

教育実習

私と大学との公的な関わりということで、学生との関係でまず出るのは「教育実習」である。本校の教育実習係を始めてから5年経つのだが、その間に実習生から感じた大学について書きたいと思う。まず本校に教育実習で来た学生は最初に単位制ということで戸惑い、授業の中身で頭を抱え込むことが多い。総合学科になり、一つ一つの授業が単位制で、生徒が大学のように好きな科目を選択することができる。それゆえ5名位の少人数から大人数の授業まで様々な授業形態があり、ただでさえ教壇に立つことがなかったうえにこの時点で非常に戸惑っているようだ。

また、それらの科目が今までに教わったことのあるような科目であればよいのだが、「小論文演習」や「身近な科学」、「環境科学」、「植物生態学」等といったように初めてお目にかかるもの（学校設定科目と言う）ばかりなのである。

教育実習は自分が知っている科目でさえ生徒に伝えるのは難しいことである。学生はかなりのプレッシャーを感じなが

ら教育実習に臨んでいると思う。

しかし、筑波の学生はここから抜け出すのが非常に早く、また手を抜こうとしない学生が多い。解らないものは自分で理解し、徹夜してでも翌日の授業を成功させようという意欲のあふれた学生ばかりである。

本校には合宿所を開放して教育実習期間中に学生の宿泊所としているのだが、その電気が一晩中ついていることもめずらしくない。朝、学校で真っ赤な目をしている学生が非常に多いのが印象的である。

生活態度にしても非常に感心することが多い。本校では校舎新築後、教育実習生の控え室が無くなり、実験室の準備室という小さな部屋に押し込められている。この部屋は、窓もなく、6月のI期の実習生などは非常に暑く缶詰状態になってしまう。そのような環境でも不平不満を漏らすことなく、黙々と授業案を作ったり、実習生同志で授業について語り合っている。

前出の合宿所にしても、30名位が入る限界であるところを布団を隙間無く埋め、押し入れを利用しながら暮らしている。この忍耐強さや勉強熱心な事には心から感心する。大学でも授業や研究を熱心に行っている証拠であろう。このよう

に、一つのことを成し遂げるには、様々な苦労や困難がつきまとうものである。しかし、実習生はその困難をさけることなく立ち向かっている。

教育実習期間は短いもので、授業や生徒にも慣れた頃に終了してしまう。しかし必死になって取り組んだ経験や、実習生同志の人間関係は、その後の生活の大きな財産となることであろう。

このような学生たちを支える大学教職員の方々や環境は素晴らしいものであると思える。恐らく学生は今の環境が普通と思いきこんでいるのではないだろうか。しかし、その環境を作る努力は並大抵のことではないと思う。いろいろな場面で学生を支えているたくさんの人のおかげである。高校までと比べて、人間関係が希薄になり易い大学という場で、素晴らしい経験をしているのである。

大学の様子

私は年に4・5回ほど大学に何う機会があるが、その度に道を間違え、目的地に直接行き着けたことがない。それほど筑波大学は大きく広いということである。しかも、しっかり整備されているこの広さや環境は他の大学には見られないもので、学生にとって非常に有益なものであると思われる。

私の母校は都内にあり十数の学科が一カ所に集まる学校であった。校内は教室が点在し、非常に雑然とした感があった。それに比べると筑波大学は、大きな敷地内に学群ごとに整備され、その機能性も失われないように配置されており、学生、教職員にとって非常に快適な環境であると思う。

この環境を維持することは大変なことだと思う。道端の雑草やゴミを取る事をはじめ、この環境を維持・整備することは、いろいろな人が毎日積み重ねで行っているに違いないだろう。こういう風景を学生たちも見て、実際の社会勉強として身に納めていくものだと思う。

また、学生寮においても各自の自立心が磨かれているに違いない。一見自由とも見える学生生活ではあるが、自由の中

にも規則があり、その中で自然に成長していく彼ら。筑波大学は勉強以外にも、人間生活において非常に重要と思われる様々なことを磨くことができる場であると思う。このことは、学生においてなによりもの幸せであると思う。

附属学校としても筑波大学を見習い、人間としての生徒の成長を援助する組織体制を持ち続けて行きたい。同時に日本の教育の先進的な役割を担えるよう、教育・研究の両面に対して、今後も日々努力したいと思っている。

最後に様々な先駆け的なことを実践し、日々努力を重ねている筑波大学の今後のさらなる発展を附属学校の一員として心よりお祈り致します。

(しみずせい 附属坂戸高校)

